

荒木徹さんの思い出文集



2026.7.26 京大知球会有志(東京・丸の内)

思い出ひとつ

水間満郎(1959 気象)

今も残っている荒木徹さんの思い出はひとつだけですが、荒木さんの人柄を偲ぶよすがになると思います。

何の用件だったのでしょうか、多分地物同窓会のこと、荒木さんにメールを送ったことがあります。書き出しが「荒木徹先生」でした。すると直ぐに返信が来て、中身は「先生はやめてください」でした。さらに地物同窓会総会の席上でも念を押されました。

白楽天の詩に『往事渺茫として都(すべ)て夢に似たり』があります。上述の私の記憶もまさにその通りで、今となっては曖昧至極です。京大知球会のホームページにある過去の役員や知球会命名の経緯から事態を整理すると以下のようになるかと思います。

メールを送ったのは荒木さんが知球会会長の時の事でしょう。先に地物同窓会と書いたのは私の記憶のままですが、知球会命名の経緯

からすると平成23年に荒木さんが会長に就任したのと同窓会が知球会となったのは同時のようですので、メールを送った時期はその翌年平成24年かそのちょっとあとの頃、総会で会ったのもその頃でしょう。

記憶ではまだ教員(京大教授)だった荒木さんへのメールで、現職の教授宛ですので先生と付けたのだったと思っていました。しかしインターネットに残る荒木さんの経歴によると定年退職が2002年(平成14年)で、地物同窓会が出来たのが平成15年ですので、これはあり得ません。記憶は作られるという一例になるでしょう。

何はともあれ、荒木さんから言われた「先生はやめてください」は動きません。総会の席上での念押しの面影、インターネットには顔写真も残っており、それと一致する面影と併せて大事にしています。

荒木 徹君の追憶

奥西一夫(1961 海洋)

はじめに自分自身のことを書くことをお許し下さい。丹波の山奥から京大に進学した私は、京都でラジオ店を営んでいた私の親戚を中心に形作られていた、同じ村の出身者の小さい社会に半ば寄生するような形で学生生活を送りました。生来の人見知り体質もあって、同級生や同学科に積極的な交友関係を築く努力はしませんでした。一回生の時から同級の徳田八郎衛君が、府県境を挟んで同じ丹波出身ということで、何かと親切にしてくれて、彼の荒木君の追憶文にあるように彼と荒木君は親友でしたから、荒木君には「友達の友達」という関係で仲良くしてもらいました。この三人で三回生の春休みにスキーに鉢伏高原へ行ったの

が私にとっては宝のような思い出です。そして三回生に上がるときに三人は同じ地球物理に分属(荒木君と徳田君は地球電磁気、私は海洋・陸水)し、卒業後徳田君は防衛庁に就職、荒木君は地球物理学教室、私は防災研究所と別れました。その後、私は助教授になって地球物理学教室の授業を担当することになりました。月に一度顔を合わせるくらいでしたが、一応定年退職まで「同僚」ということになりました。

荒木君の気質をひとことで表すと、くそまじめで献身的と言えると思います。生まれつき怠け者の私は彼の並外れたまじめさにはそれほど惹かれませんでした。献身性には惹かれました。彼の地球電磁気分野の研究における献

身的努力は広く知られていますが、防災研究に身を投じた私は彼の献身性に学ぶべきだと強く感じてきました。しかし、災害現場で打ちひしがれた状況の被災者に私はこう言わねばなりません。「あなたのお話は私の研究に必ず役に立ちますが、それがあなたの生活に役立つことはまずないでしょう。しかしそれは何らかの形であなたのような被災者を生まないことに役立つはずです」。これを聞いて協力を拒む人は一人もありませんでしたが、何のこ

とはない。私が献身するのではなく、人に献身を強いて来たのです。私が研究者として献身するようになったのは退職後、被災者や災害発生を心配する人(潜在的被災者)の相談に乗る学術ボランティアに参加してからのことになりますが、あまり強くは意識していなかったものの、常に荒木君と自分を比較して怠惰な自分に鞭打ってきたように思います。荒木君には唯々感謝です。



写真説明：1960 年3月、3回生の春休みに氷ノ山登山。左から徳田、奥西、荒木。

荒木徹君の意外な一面

徳田八郎衛(1961 電磁気)

理学部地球物理学教室同窓会(知球会)HPに「荒木徹君の思い出」と題し、①故人の人物・優しさ、②二人が育った環境の類似点、③学友というよりは岳友だった学生時代について書かせて頂きました。ここでは皆様が「そんな一面があったの?」と思われそうな事項を二つお伝えします。

1) 京都大学理学部への愛情

熱い熱い8月16日の京都。元気な学生諸君とテニスコートで対戦し、夜は一緒に大文字の送り火を観る私を「ようやるねえ、君の愛校心や愛郷心には脱帽するよ」と揶揄う荒木君でしたが、彼も強い愛校心を秘めていました。すなわち京都大学理学部への愛着、帰属意識、プ

ライド、広報意欲です。それは、彼が理学部の所属員、構成員であり、職場でもあったから当然かもしれません。

八十路を迎え理学部の同期生が次々と逝き、「〇〇君を語る会」や「〇〇先生を偲ぶ会」が催されるようになると、「理学部で故人の学友でした、と名乗って参加してきてくれ」と絶えず要請が来ます。「京大理学部を担ってきた荒木です、と大声で名乗って君が行くべきでは? 私なんか TOKUDA、Who? だよ。参加者も、故人の奉職先の関係者と、かつて会長を務めた学会の関係者が主体だから、母校理学部の出番なんかないよ」と逃げると、「聴いてみると故人の小学校や高校の友人も多数追悼

会に行くそうだと。故人の人格や勉強好きの性格を育成したのは小学校や高校だろうけど、研究者に育て上げたのはやはり京都大学理学部なんだから、そこからも誰か行くべきだよ。ぼくは個人的な付き合いが故人となかったけど、君は故人の最後の出版まで付き合い、書評も頼まれた仲間なんだから適任者だ、是非、理学部仲間としての思い出を話してあげてよ」と説得が始まります。

葬儀や法要、追悼会が「それなりに意味がある」と見る伝統派の私は、これらの儀式への参加にも積極的だったから、彼の依頼に違和感はありませんでしたが、彼の理学部への愛情を改めて認識した次第です。

2) JATP への修士論文寄稿

電磁気専攻の院生が、ほぼ自動的に入会する日本地球電磁気学会(1987年に地球電磁気・地球惑星圏学会に改称)の会誌は、英文の JGG(Journal of Geomagnetism and Geoelectricity)でした。だから修士論文を寄稿するとなると、キザなようだが最初から英文となります。ただ、院生の活発な論文寄稿については、指導教官側に二つの見方がありました。「京大に〇〇あり」と早くから知って頂くと、就職も含め有利である、という積極論と、「若いうちから名は惜しめ。すぐに引っくり返されるような仮説などを軽々しく発表したら、誰からも相手にされなくなる」という慎重論です。幸い私の場合は、ホイッスラー空電の徹夜観測に基づく「分散値(D)が極端に小さいホイッスラー」の報告だから引っくり返される恐れはありません。修士1回生の秋、「宇宙線と地球嵐国際会議」で書生役を1週間務めたシドニー・チャプマン先生に「空理空論よりも地味な実験や観測の積み重ねは強いぞ」と励まされた自負?もあり、Dr.1回生の春は、学会での口頭発表よりも先

に文章化を進めていました。

それに待ったをかけたのは荒木君でした。「先生方には悪いけど、JGG はさほど海外で読まれているよ。それに国内ではホイッスラーやっている人も少ないから、読んで貰えない。徳田レポートは、海外の雑誌に寄稿した方が、大勢の専門家に読んで貰えるのでは?」との温かい助言。さりとて発刊して未だ10年の「国産」JGGを見捨て、大勢に読んで貰えるという理由で「舶来の国際的雑誌」に走っているのか?ドライに割り切れない私でしたが、意外なことに荒木君はドライでした。学部卒業後、福井大学工学部応用物理学科の助手となり、物理屋さんと交わってきたから、啓蒙されていたのかもしれない。

しかし無名の日本人院生が権威あるJGR(米国地球物理学連合会誌)に寄稿するわけにもいかない。相談した結果、英国で刊行されている Journal of Atmospheric and Terrestrial Science(JATP:大気と地球周辺科学)に送ろうということになりました。助教授の前田坦先生に相談すると「それは名案です。気象屋と超高層物理屋の雑誌だから、雷や空電の論文も多い。この夏には東京で URSI(国際電波連合)総会があるけど、この URSI も JATP のスポンサーなので、この雑誌にはホイッスラーも含め電波関係の論文がよく載るのです」とお墨付きを下さいました。「下手な英文だ」と差し戻されることもなく秋には掲載されました。掲載料が請求されましたが、荒木君は「国際的に認知される為の手数料だよ」。

大学院を終えた後、私は電波屋の世界を渡り歩きます。「今はこんな職務に就いておられますが、貴官のバックグラウンドは何だったのですか?」と訊ねられると、この JATP 寄稿のコピーを見せていました。改めて荒木君の先見性、国際性に感謝しています。



写真説明:1960 年 10 月に京都大学地球物理学教室を会場として開催された日本地球電磁気学会秋季講演会・総会での記念写真。講演会・総会に先立ち、第4次南極越冬中に遭難された福島紳会員(1954 電磁気、理化学研究所勤務)の追悼式が行われた。この写真で氏名を記したのは京都大学地球物理学教室の教員・院生・学生であるが、4回生の奥沢学生・徳田学生の右に宮越潤一郎さん(1953 測地)の姿があるのは地電流がご専攻だからと後で伺った。荒木学生の姿が見えないので、彼がカメラマン役を務めた可能性がある。当時は、春は東大理学部で、秋は地方都市で講演会・総会は開催されていた。翌年の 1961 年秋には長谷川学長、荒木助手が勤務する福井大学で開催され、エクスカーシオン先は紅葉の永平寺。大先生方と並んで座禅を体験した。

荒木徹先生のこと

尾池和夫(1963 地震)
(京都大学名誉教授、氷室俳句会主宰)

1963 年 3 月に地球物理学科を卒業した私は卒業後、防災研究所の助手となって鳥取の観測所勤務の後には宇治キャンパス勤務でした。荒木先輩と出会うことがほとんどありませんでした。防災研究所の助教授の時には地球電磁気学講座の小川俊雄先生の実験室に出入りしていて地震発生にともなう電磁放射の研究に

熱中していましたが、荒木先生とはご縁のない実験室でした。

1988 年に私が理学部教授に転任してからは急速にご縁ができました。1989 年 11 月 16 日木曜日には定例の教室会議、教官会議、協議会、教授会があり、その日は荒木先生が教授に着任された日でした。夕方、皆さんご存じ

の天寅で地球物理の教授と助教授が集まりました。話がはずんで遅くなりました。その時から荒木先生とはさまざまな場でお目にかかりましたが、多くは会議の場での議論とその前後の打ち合わせで、おもに大学の運営や人事に関することでした。例えば、地球物理学教室の将来計画を議論する会議です。1990年1月11日、9時から教室の将来計画委員会でした。協議会メンバー全員が出ました。私が力を入れていた地震学講座が教授1、助教授1、助手1で通ったときでした。その機会に将来計画を大きく見直すことになりました。学生増募に伴う助教授を要求したり、教室の紹介のためのパンフレットを作る計画を練ったりというような内容です。とくに学生増募の件を中心に、やるべき課題などを話した中で、荒木先生は固体地球の電磁気学をやる必要があると主張され、私は地球中心核の研究、惑星の研究、上賀茂の充実などを考えたいと意見を述べました。会議の後、教授だけで新講座の人事をどうするかについて意見を交換し、教室のルールに則って進める前に教授の懇談会で議論することになりました。その年の5月、小川俊雄先生の定年退官を記念して小川先生の講義を楽友会館で聞きました。その頃から教室全体の人事のことを議論するようになりました。地震学講座は私自身が担当させてもらう意志を明確にしておいて、それをもとに全体像を考えました。教授と助教授の組合せをうまく運営して固体地球の分野を4つの柱でやったらいいというのが荒木先生の意見でした。人事の問題では具体的に口に出せないようなこともあり、話が禅問答みたいになってしまうことがあったのですが、本来そういうのはよくないということで私と荒木先生の考え方が一致していました。

荒木先生が専攻主任のとき、院生の金尾氏が南極へ行くことになり、助手のポストを借りることが必要になりました。とてもお世話になって実現できました。また、私の所に中国からの訪問客がよくありましたが、荒木先生には地磁気

世界資料解析センターを案内してもらった機会がたびたびありました。防災研究所の地震予知研究センターの運営協議会でも、荒木先生にはメンバーになっていただきました。職員組合と学部長の面談で地球物理だけが約束の時刻を守って集まることが多く、「暇と思われるのはいやですね」という声が出たとき、すかさず荒木先生は「忙しいからこそ、定刻に来ているのです」と言われる場面がありました。先生の人柄が表れる場面でした。その人柄は将来計画で磁気圏物理学を中心とした拡充をはかる考えについても、一般論から執拗に持論を展開されました。教授懇談会でも荒木先生がご自分の主張を強く出せば議論が進まずに持ち越しとなる場面が多くありました。そのご活躍の内容には書き尽くせないものがあります。

時はうつり、2002年3月15日金曜日、荒木先生の定年退官最終講義と祝賀会が北斗で開催され、宇宙天気予報の話を書きました。この「宇宙天気予報」という言葉を大いに利用させていただいて、荒木先生の定年前に文部科学省とのやりとりを乗り切って教授のポストを純増で獲得することができました。そもそも地球物理学教室にぜひと私を誘ってくださった方のお一人は地球電磁気学講座(後に太陽惑星系電磁気学講座)の杉浦正久先生でした。そのときから地球電磁気学研究グループの方々から、さまざまな形で世話になりましたが、これが少しでもその恩返しになっていたらうれしく思います。このことが「ユニークなセンターとして世界的にも注目されるようになり、1999年度には、教授ポストを付けて頂いて、独立することが出来ました。皆様のご支援に厚くお礼申し上げます」と「地磁気センターニュース」(No.73:2002年5月30日)にあります。

荒木徹先生のご活躍を思い出しつつ、関係研究分野のますますの発展をこころからお祈り申し上げます。

福井大学と荒木徹先生

有賀祥夫(1965 年大学院入学・海洋)

私は昭和40年4月に、京都大学大学院修士課程の第二講座(海洋・陸水講座)に入学しました。

荒木さん(先生)との最初の接点は、荒木さんが学部を卒業されて福井大学応用物理学科の助手として着任された年に私は福井大学に入学したときに(昭和36年4月)。世界では、旧ソ連の宇宙飛行士ガガーリン大佐が、人類初の有人宇宙飛行に成功したときです。でも、荒木さんは翌年3月に退職され京大の大学院に進学されたので、1年間だけ福井で一緒に過ごしたことになります。当時の福井大学の学長は長谷川万吉先生(昭和33年から6年間在任)で、応用物理学科の創設者です。荒木さんは長谷川学長から福井大学着任を請われたと聞いていました。

応用物理学科は4講座から成り(量子物理、物性物理、物理計測、応用物性)、荒木さんはそのうちの物性物理講座の助手として物理実験を担当されました。

荒木さんが福井大学で一年間過ごされたご縁で、その後、京都での学生時代、および京都を離れてからもお世話になりました。最近は何年にも一度の割合になりましたが京都駅近辺でお会いし、私の近況や長谷川先生のこと、福井の話題を中心に楽しく過ごしました。直近ではオンラインでお元気な様子を拝見し、再会を呼びかけられたのが最後になってしまいました。心残りです。

以下に、荒木さんが懇意にされていた山本浩史先生(福井大学名誉教授)が、学科創立五十周年記念誌に寄せられた寄稿文(応物創立当時の私的な思い出)から、荒木さんとの関連箇所を一部ご紹介します。

「昭和35年(1960)の年の瀬も迫る頃だったかと思う。湯川(秀樹)先生に呼び出しを受けた。当時私は基礎物理研究所(通称湯川記念館)に、非常勤研究員として在籍していた。所長室に行ってみると、山崎(和夫)さんも呼び出

されて来ておられた。所長室には湯川先生の外に京都大学名誉教授で地球物理学の権威と言われた長谷川(万吉)先生も同席しておられた。湯川先生の仰るには「君達、福井大学に行かないか。」というものであった。私には就職先の当てがなかった折であったので、喜んでお受けしたものである。

想像するに、長谷川先生は福井大学の学長で、工学部に応用物理学科を作られその人集めに湯川先生に相談されたものと思われる。何故私に白羽の矢が立ったのか全く分からなかった。こうして私の福井大学行きは決まったのである。」

「私が着任したとき、応用物理学科は最初の学生が二年生になったばかりで、教員は八木(壽郎)先生が一人居られた。そこに新しく山崎助教授、山本助手と、もう一人荒木徹助手が入った。」

「荒木君は地球物理学科を卒業したばかりであった。私は彼の話にも興味があって、ドーンコーラス(暁の合唱)という現象を面白く聞かせてもらった。」

「或る時、荒木君と学生部に行って、野球のグラブとボールを貸して貰った。学年と名前を言えと言われて口ごもっていると、「まあいい、貸してやれ。」と係の人に声を掛けられたのが当時学生部長をしておられた笠井助治という学芸(現教育)学部の教授であった。早速荒木君とキャッチボールをしていると、「あっちに行ってやれ！」と笠井先生に言われた。あとで、「あれは先生だよ。」と周りの人に言われて、頸をすくめておられたとか。こんな具合で、学生に間違われる位であったから、学生からも兄貴分位に思われていた。」

「なお、山崎和夫氏は現在、京都大学名誉教授で、今でも年賀状の交換や年一度の会合で会っています。荒木徹氏も京都大学名誉教授で年賀状の交換があり、今も研究を続けて居られます。」



応用物理学舎落成記念祝賀会で挨拶する長谷川学長とすぐ手前の荒木助手

荒木徹先生の思い出

里村幹夫(1970 測地)

私は第一講座(測地学講座)の出身で、荒木先生との関係は深くはなかったが、学生時代の経験でよく覚えていることが1つある。それは3回生の時の地球物理学実習でホイッスラーのことを教えていただき、その実際の音を聞かせていただいたことである。

今となっては記憶も定かではないが、3回生の時に地球物理学実習という授業があった。我々の学年の地球物理学科の学生17名が5つのグループに分かれて、5つの講座を順に周り、その講座でやっている研究を実習として経験させていただく授業だった。その授業で、当時地球電磁気学講座の助手だった荒木先生が、今も地球上のどこかで雷が鳴っていて、

その時に発生した電波が地球の周りを伝わり。ラジオでその電波を音に変換して聴けるという話で、その音を実際に聞かせていただいたことがとても興味深く感じ、今も思い出される。

実習としての作業は具体的に何をやったのか、ほかの講座でどのような実習をやったのかは、よく覚えていないが、荒木先生からホイッスラーの説明を受け、その実際の音をラジオで聞かせていただいたことはよく覚えている。

その後、私と荒木先生とは専門分野で交わる機会がなかったが、私が知球会関東支部の役員を数年間務めていた間に、荒木先生は知球会会長をやられ、大変お世話になった。どうもありがとうございました。

生涯一研究者 荒木徹先生

家森俊彦(1975 電磁気)

1977 年 4 月に設立された理学部附属地磁気世界資料解析センター(地磁気センター)に荒木徹先生が助教授として着任されたのが 1977 年 10 月で、私が地磁気センターの助手に採用されたのが 1981 年 1 月でした。1989 年 11 月に地球物理学教室の教授に昇任されてからも、2000 年 3 月までは地磁気センター長を併任しておられましたので、約 20 年間荒木先生の下で働かせていただいたことになります。ただし、最初の約 3 年間は地球物理学教室教授の前田坦先生が地磁気センター長を併任されており、地磁気センター設立の中心人物であった前田先生の指導の下でその業務に当たっていましたので、その間は荒木先生から直接何かを指示された記憶はありません。私自身も助手になって 1 年半ほどで NASA/GSFC におられた杉浦正久先生の下に 2 年間行かせていただいたため、実際には帰国後の約 16 年間、荒木先生の方針の下で地磁気センターの活動の一端を担わせていただきました。

地磁気センターは理学部の附属施設なので附属施設経費という予算が付いていて、地球物理学教室所属の各研究室に比べると予算的には多少恵まれていたようですが、それも徐々に減額され、また、専任の教授ポストもなかったもので、荒木先生の方針としては、国内外の学界からの要望が強かった地磁気 AE 指数算出の迅速化に注力することにより、それを実現・継続するための予算の増額と教授ポスト獲得につなげるということのようでした。そのため、荒木先生から私に指示があったのは、ほとんどが AE 指数算出に関連する予算申請書の作成や成果のとりまとめと自己点検報告書類等の作成であったように記憶します。それら以外は特に何か指示されることもなく、日々のデータ

サービス関連業務の他は自由に研究と教育に当たらせていただきました。

仕事の上で荒木先生に注意されたことは一度もありませんでしたが、唯一、荒木先生に残念そうな表情をさせてしまったのは、私自身の退職後お目にかかったときでした。先生が退職後にご自身が使われていたセンター長室で、残された大量の書類から地磁気センターの歴史に関連する重要な資料等をこつこつと整理されていたことを話題にし、私にはとてもそのような根気のいる作業はできませんと話したときでした。助教授に昇任させていただいた 1990 年から隔月刊で地磁気センターニュースの発行を開始し、センターの活動の主なことはそこに記事として書かれていましたので、それで良いのではないかと考えていました。しかし、2003 年から始まった 21 世紀 COE プログラムや、2008 年には多くは地球科学分野のデータセンターから構成されていた ICSU/World Data Center という枠組みがなくなり、文化系データセンターなどあらゆる分野のデータ組織を対象とする ISC/World Data System として再構築が始まったことなどは地磁気センターにとって極めて大きな出来事でしたので、先生の表情を今思い出すと、それらへの対応や、毎年の予算のことなど一般読者向けには不適當で地磁気センターニュースには書かなかったことを含め、面倒でも昔のファイルを開いてぼちぼちまとめ始めないといけないかなと考えています。

20 年間同じ建物の同じ階にいて、ほぼ毎日顔を合わせていたにも関わらず、当時の荒木先生を思い出そうとしても不思議なくらい記憶が出てきません。スマホで毎日気軽に写真を撮る現在とは違い、特別なイベントの時しか写

さなかったもので、わずかですが手元にある写真に荒木先生が写っているのを見て、ああこういうことがあったな・・・と思い出す程度です。その数少ない写真を数枚文末に添付します。毎日顔を合わせていても、面倒なことはほとんど要求されなかったためか、おそらく私にとっては空気のような存在、すなわち、普段は特にありがたみを感じないが、おそらく急におられなくなると、途端にそのありがたさに気づくであろう存在だったのかもしれない。

荒木先生について私がつくづく感心すると共に、自分にはまねができないと思うことは、重要と思われることについては十分考えぬくと共に、それを人に伝える際は言葉を選び、よくとおる低音のいい声ではっきりと話されていたことです。今思い返してみると、普段、無駄話はほとんどされず、肝心で必要なことを的確なタイミングで何度も話されていました。それが聴く人に感銘を与えていた理由であると思います。先生には私の結婚式にも出席していただいた

のですが、式の後、私の父が、「荒木先生は賢い人だ・・・」と感心していました。なぜそう思ったかはそのとき訊きませんでしたが、おそらく荒木先生との会話から、私が今頃になって気がついたことと同様なことを感じ取ったのだと推測します。最近、先生のお誕生日が私の一日前であることを知りました。やはり『一日の長』があったのだ、仕方がない・・・一日どころではないでしょうが。

荒木先生が生前何度かおっしゃっていたことで、できれば私も見習いたいと願っていることは、自分は生涯一研究者でありたいというお言葉です。実際、85歳になられた2023年にも「解説：地磁気急始変化」の筆頭著者としてそれを実践されていました。亡くなられる1ヶ月余り前に電話をいただいたときも、以前と同じはっきりした良い声でご自身の闘病状況をわかりやすく説明されましたので、病魔さえなければまだまだ研究者として活躍されたに違いないと残念です。

荒木先生の思い出

谷 伸 (1976 海洋)

私の学部時代、地球電磁気学は前田先生に教わっており、荒木先生との接点はございませんでした。

海上保安庁水路部に奉職し、日本海洋データセンター(JODC)に在職中、世界データセンターを務める米国国立地球物理データセンター(NGDC)の研究者を地磁気世界資料解析センターに御案内したことがあります。1989年から1990年のことであったろうかと思います。スギウラ先生、荒木先生、亀井先生、家森先生が我々のお相手をして下さいました。その時、初めてお目にかかりました。

その後、お目にかかったのは知球会の幹事として、でした。知球会初代の会長は山元龍三郎先生、次に田中虎夫先生、で荒木先生は2011年から知球会三代目会長の任に就かれました。

会長として大変精力的に御活躍され、御指導頂きました。

不肖私が2012年に内閣官房から海上保安庁海洋情報部に舞い戻った際に、その旨御連絡を申し上げた際には、以下のような胸が熱くなるメールを頂戴致しました。

谷 中将 殿:

古巣へ帰られて良かったですね。

私は、ICSU-WDC for Geomagnetism, Kyotoの運営を通じてデータ体制についての日米の格差を痛感し、今でも、機会があればこれについて発言することになっています。

気象・海洋・測地分野は、気象庁・海保庁・国土地理院という大きな国立機関に支えられています。データ取得・処理・データベース化・公開の全てを研究者がしなければならない地球電磁気学・太陽地球系物理学では、問題は深刻なのです。

海保庁には海洋情報部という情報を看板にした部局があって、データが重視されている事が判り、そのJODCは、日本のデータセンターとしては充実していて、これがあるので大学研究者は自らが動かなくても良いのだと羨ましく思っていました。

上記3機関は別にして、一般に、日本政府のデータ・情報の重要性の認識は浅く、これがデータ体制日米格差を作っていると私は思っています。これを直すためには総合科学技術会議が国としてのデータポリシーを決め、それを受けて各省庁それぞれのデータ政策を進めることが必要だと思います。

海洋情報部長という要職に就かれたのですから、日本のデータ体制改善に、最後のご奉公をお願いしたいと期待します。ビッグデータという風が吹いてきたので、悪い時ではないと思います。

荒木 (データ体制に関する拙文を添付します)

さて、三代目荒木会長のご示唆を受け、

2013年の総会で関東支部の設置が決定され、2014年2月22日(土)に徳田先輩のお骨折りで関東支部立ち上げ幹事会第2回会合が有楽町のROSE&CROWNで開催され、荒木先生が御臨席下さいました。

2014年11月15日(土)に関東支部の発足会合が京都大学東京オフィス(当時は品川インターシティA棟27階)で開催されて、荒木先生も御参加下さいました。荒木先生の御参加のお陰で、発足会合には多くの高名な諸先輩を含む38名もの同窓生がお見えになりました。

荒木先生が精神的の中軸となった関東支部の立ち上げであった上に幹事会や発足会合に御参加下さったことが奏功したのでしょうか、当初の幹事団の中の地球電磁気学出身者の比率は極めて高く、現在でも関東支部の中軸です。幹事に名乗りを挙げられた長尾さんから胸が熱くなるメールを頂きました。一部を紹介します。

東大地震研の長尾大道と申します。

京大地物出身者の方の勤務先が、実は関東に集中しているにも関わらず、首都圏で働き始めてからも孤立感を覚える場面がかなり多くあり、「人をつなぐ」ための基盤の必要性をずっと痛感しておりました。

荒木先生を始めとする大先輩の皆様方が、今回このような組織作りに立ち上がって下さったことに共感し、微力ながらもお手伝いさせて頂ければと思い、名乗りを上げさせて頂いて次第です。

荒木先生のご人徳と御指導の成せるわざと思います。

荒木先生、これからもどうぞ我々をお見守り、ご指導ください。

荒木先生を偲んで

品川裕之(1980 電磁気)

私は学部4回生の時、地球電磁気学講座を選択し、前田坦先生の下で卒業研究をすることになりました。その時荒木先生は米国に長期出張中でしたので、お会いすることはできませんでしたが、詳しい経緯は覚えていないのですが、その頃荒木先生は、学内に VLF 電波の観測装置を設置していたようで、先生が不在の間、私がその点検作業をすることになりました。ありがたいことに謝金もいただいていたと思います。当時はインターネットなどありませんでしたので、時々手紙で指示が送られてきて、その几帳面な文面からかなり厳格な先生だろうと想像しながら作業をしておりました。その後、同講座の修士課程に進んだ頃、荒木先生が帰国され、ようやくお会いすることができました。想像していたのとは違い、優しく落ち着いた感じの先生でほっとしました。

私は修士課程進学後、博士課程から米国の大学に留学することを目指しておりましたが、応募には推薦状が3通必要で、その一つを荒木先生にお願いしたいと思い、恐る恐るお願いに行きましたところ、快く引き受けていただきま

した。その上、米国の研究環境や生活全般にいたるまでいろいろな情報を教えていただきました。そのお陰で無事ミシガン大学大学院に入学が認められ、学位を取得することができ、大変ありがたく思っております。私が京都大学を離れてからは、研究テーマが違うこともあり、話をする機会はそれほど多くありませんでしたが、折りに触れさまざまな形で助言や支援をしていただきました。いつも非常に多忙だったにもかかわらず、学生や若手研究者に対して時間と労力を惜しまず支援する姿に感服しました。

先生は 80 歳を過ぎても精力的に研究に励まれておられました。数年前に一度学会で荒木先生をお見かけして、「先生お元気ですね。まだ研究を続けているのですね。すごいですね。」と声をかけると嬉しそうに笑っていたのを思い出します。しかし、残念ながら荒木先生にお会いしたのは、この時が最後になってしまいました。温厚でユーモアもありながら、学間に対する強い情熱と信念をお持ちだった荒木先生を偲びつつ、ご冥福をお祈りいたします。

荒木徹先生を偲んで

牧野雅彦(1980 電磁気)

先生は私の直接の指導教官ではないのですが、在学中から学問・研究のみならず人間としての在り方について多くをご指導いただきました。1985 年に私が地質調査所(現、産業技術総合研究所地質調査総合センター)の採用面接を受けた際にも、荒木先生がつくばまでお願いの挨拶に赴かれたことを数年後にご本人から伺いました。先生は教育面の指導では厳しさがありますが、どうやって生きていくのかと

いう人生面での献身的で暖かいご指導のおかげで、今の私が存在するのだと思っています。就職後も先生にお会いするたびに「最近どう？」と声をかけていただきました。

さて、私にとって小さな転機となったエピソードについてご紹介させていただきます。1984 年の夏に、講座と地磁気センターの先生たちに引率されて院生と学生を丹後半島の海水浴場へ行きました。その当時は高速道路もなく一

般道を数台の自家用車にみんなで楽しく分乗して行きました。研修のため、丹後半島の山奥の廃校に設置された地磁気観測装置を見学しました。海水浴では単に遊ぶのではなく 2 km の遠泳という課題が出されました。この課題のため京大のプールで事前に遠泳の特訓を行いました。当時の私は 52 kg と痩せていて浮力が小さくプールの底に腹ばいになることができませんでした。つまり、じっと静止していると沈んでしまうので絶えず手足を動かす必要がありました。プールの特訓でクロールや平泳ぎはすぐに疲れてしまうので横泳ぎが一番楽なことが分かりました。みんなで遠泳が達成できたときの喜びは忘れることができません。国際誌に論文を投稿中で研究に行き詰まっていた私にはとても良い気分転換と自信になりました。不思議なことに、その後、論文の修正を厭わなくなりまし

た。

就職後も 2001 年独立行政法人化、2009 年からの事業仕分けによる存立危機等々について荒木先生にはご相談に乗っていただきました。関係省庁との交渉では粘り強さが大事だと、地磁気センター設立の話や杉浦正久先生(私の博士論文の指導教授)の米国 NASA から京都大学招聘時の文部省との交渉エピソードを教えてもらいました。おかげさまで相次ぐ逆風の嵐を乗り越えることができました。

荒木先生は学生たちに真摯に誠実に向き合われていました。そのため、お声がかかれば馳せ参ずることを厭わない傾向が 5 講座では強かったと思います。先生から学んだ多くのことは、今でも忘れることはできません。

こころより感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

荒木先生の思い出

山内正敏(1983 電磁気)

私が 3 回生になった時、講座 + 地磁気センターは、前田教授、小川助教授、荒木助教授、家森助手、亀井非常勤講師という陣容で、その割に学生は博士課程が 2 人、修士課程が 1 人、4 回生が 2 人というという贅沢な教育環境だった。しかし、翌年、家森さんが NASA に 2 年間出かけ、同じ年の 3 月には前田先生が退官され、さらに 2 年後には小川先生まで他大学に転出されて、私が修士を終える頃には荒木先生ひとりで講座と地磁気センターの両方を回されていた。杉浦先生が赴任されたのは私が D1 の秋に留学した後だった。

このスタッフ不足は、荒木先生の指導を受けていた私にとって自由勝手に研究する良い口実となり、好き勝手に試行錯誤させてもらったと思う。とはいえ、荒木先生と亀井さんが集中的に行なっていた Magsat 衛星解析は、その統計的手法が私の性分に合っていたこともあって、その後の研究の礎となった。その意味では、セミナーやお茶話を通して、しっかりと指導

を受けていた。後日、荒木先生に話を聞くと、生徒の性格を見極めて、特定の課題を与えるかどうか、何処まで口出するかは変えるとのことで、さすがは、荒木先生だと感心まじりに納得したものだった。

このように、研究に関しては主に間接的に学ぶ方が多かったが、直接的な指導もしっかり受けた。それは発表と英語と進路。前二者は多くの院生が似たような指導を受けるだろうけど、進路は私にとって特別だったと思う。アラスカ留学を M2 の秋に突然思いついた私に、国内の複数の先生方と移動を前提での面会をアレンジしていただいたし、アラスカで博士を取得した際も、国内での就職先を推薦していただいた。結果的には偶然スウェーデンにポストを見つけたが、それでも、ちょっとした縁でもしっかり最後まで面倒を見て下さる荒木先生に大いに感謝したものだ。

直接的な思い出となると、指導教官という場面よりは、「課外活動」のほうが多く残っている。

海水浴は先輩が書いて下さっているの、ここでは花見とお茶会を。

M2の11月頭の日曜に電磁気と気象とでソフトボールの試合をすることになった時、試合自体は2時間かからずに終わったものの、先生方は丸一日開けておられて、このままでは勿体ないとばかりに花背峠まで先生方の車で行き、その泉(今でも有名だろうか?)の水で峠からの景色を眺めながら抹茶を立てて飲んだ。亀井さんがお茶の名手だったことも大きいけど、なにより荒木先生がリリリで、ついでに、私が思いついたばかりの留学についても色々助言を頂いた。

これがきっかけで、翌春の新歓では花見＋抹茶を疎水の滋賀側で行なった。新歓で花見をするのはこの時が初めてで、その後も数年

以上は続いたようだけど、今はどうのだろうか？

他の花見の場所として、当時の旧演習林事務室(今の学生相談センター北部相談室)の庭のしだれ桜をおすすめ下さったのも荒木先生で、何かの機会にそこで花見をしたいに先生を巻き込んだ事も覚えている。

このように、荒木先生は研究と息抜きの両方に多くの楽しみを体感させて下さったし、それらを通じて、私が室内科学的な物理や数学より、自然現象を対象にする地球科学に向いていると確信させて下さった。

荒木先生にご冥福を。

荒木徹先生への感謝

川島慶子(1983 電磁気)

私が京都大学理学部の地球物理学教室で荒木徹先生のゼミに入ったのは全く偶然というか、あまりにもいい加減な理由であった。じつは私は当初は宇宙物理学教室に行くつもりだったのだが、三回生で天体観測をして、その不規則な生活(観測は夜中で、授業は昼間だったから生活リズムが無茶苦茶になった)は、腑抜けの肉体を持った私には到底耐えられるものではなかった。加えて、だんだんやりたいことが科学そのものではなく、科学史の方に惹かれていくようになった。しかし当時、科学史のある大学院は東大か東工大にしかなかった。そこで私は東大の院を受けようと思ったのである。しかしその前に京大を卒業しなければならない。

そこで荒木先生が惑星間空間(つまり宇宙に一番近い地球物理の専門)を研究されているの、いいことに、とんでもない厚かましいお願いをしに行ったのである。もちろん先生の授業は一つも取ってなかった。というか、地球物理の授業も一つも受けてなかった。

- ① 科学史の大学院を受けるから、受験勉強をしないとイケない。したがって、共同研究的卒論(宇宙物理には夜中の観測に加え、共同研究的主題しかなかった、と思う)は共同研究者の邪魔になるから参加できない。先生の所では一人で書ける卒論の主題をもらえると聞いたので、それがほしい。
- ② 東大を受けるので東京に行く機会が増えるから、あまり大学には行けないが了承してほしい。

超のつくあつかましい「お願い」だが、荒木先生は怒りもせず、不機嫌にもならず、私を引き受けてくれただけでなく、当時の東大の科学史の主任教授である伊東俊太郎先生に連絡を取ってくれ、東大を受ける際の注意まで尋ねてくれたのである。実にこの時、伊東先生が「東大の研究生になったら大学院受験の権利がなくなるので、研究生にならないように」と私

に言ってくれたことは一生の助けとなった。というのも、これを知らずに研究生になって、受験機会を永遠に失った他大学の学生もいたからである。

急ごしらえの準備だったので初回は落第し、私は一浪して東大の大学院に合格して上京したが、その後も荒木先生との付き合いは続いた。私が、ノーベル化学賞受賞者であり、劇作家でもあるロアルド・ホフマンの戯曲『これはあなたのもの』を翻訳して 2017 年に舞台化した時も、西宮の劇場まで見に来て下さり、ていね

いなお返事をいただいた。先生のご病気が重いのを知らず、自分が Elisabeth of Bohemia Prize の受賞者になったと聞いた時、授賞式が終わったら荒木先生に教えて賞状を見せようと思っていたら、京大の時に同じ荒木先生の元で課題研究をしていた山内正敏君から訃報を受け取った。先生、不詳の弟子が哲学の賞を取りました。卒論の時期、本当にわがままを許してくださり、ありがとうございました。心から感謝しております。

荒木徹先生を偲んで

牧野優子(1985 電磁気)

私が学部 4 年生になり、地球電磁気学講座に配属された頃、荒木先生は地磁気センターの助教授でいらっしゃったと思います。私自身は小川俊雄先生のもとで学ぶことになりましたので、直接の指導教官ではありませんでした。

しかし、教室の数々のイベントや就職活動を通じて、様々な接点があったと記憶しています。実際、我が家には荒木先生と一緒に写った写真がたくさん残っています。

それに加え、振り返ると人生のいくつかの節目に印象深い言葉をくださいました。

最初に強く心に残ったのは、学生時代のことです。「なぜ京大理学部には入試に国語があるのですか？」とお尋ねした際、「それはね、研究結果を一般の人にもわかるように、言わばファンタジーとしてまとめないといけないからだよ。」とお答えくださいました。妙に説得力があり、深く納得したのを覚えています。その入学試験を乗り越えたという事実は、私自身の誇りにもなり、自信にもなりました。

結婚式の際には、「うちの研究室で極めて普通の二人が結婚しました。」とおっしゃって

くださいました。それは京大生にとってはとびきりの誉め言葉だったに違いありませんが、私の元職場の上司、同僚には大ウケ。大爆笑を誘っておられました。荒木先生が紹介してくださった研究室の先輩がいらっしゃる職場の皆さんにウケたことは、私が普通以外の存在として職場にいられた証として、若干ながら恩返しになったのではないかと思います。

その後、私は育児、介護に専念する専業主婦となりましたが、25 年を経て関東支部幹事団に加わるようご連絡くださり、私を家庭の奥底から引き上げてくださったのも荒木先生でした。夫が出た方が良いのではと返しましたが、「女性幹事がいたほうがいいから。梶田さんに。」というお声がけに、お断りする理由はありませんでした。

同窓会で再びお会いできるようになり、お元気な先生に再会できたことは、今思えばまさに幸せなファンタジーのエピローグのようでした。

同窓会では、家庭内では祖母となった私の話をおもしろがって聞いてくださり、「今となってはうらやましい。」と。昔はずいぶん不憫に思っていたのだらうなと思います。何を？...を

聞くことは叶いませんでしたが、男女雇用機会均等法が施行されたばかりで、ジェンダー平等という言葉もない時代、女子学生には男子学生と同等の選択肢があったとは言い難い社会状況でした。私自身も、職場で感じた不平等に、退職と結婚を選択することを後押しされたと思います。同じ入学試験を経た女子学生が卒業後に家庭に喜んで入る姿を、荒木先生は複雑な心境でご覧になっていたのかもしれません。

荒木先生に再び引き上げていただいた私は、社会の中で少しずつ役割を持てるようになりました。昨年、「公益社団法人認知症の人と家族の会」理事という立場をいただいております。

す。日々、いつまでに何字の原稿を、この日に講話を、このイベントの広報を、この原稿の校正を...と、国語力勝負の闘いの連続です。でも、あの日の荒木先生の言葉を胸に、京都大学理学部卒業生として、自信を持って臨めています。

研究の成果を人に伝わる物語として紡ぐこと。その力を養うよう導いてくださった荒木先生のご薫陶は、アカデミアを離れても社会に生きる基礎力として人生を彩ってくださっています。

荒木先生とのご縁に深く感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

荒木先生を偲んで

中田裕之(1994 電磁気)

荒木先生を初めてお見かけしたのは、学部3 回生向けのゼミ(課題演習)の説明会の時でした。当時の私はどちらかといえば宇宙物理学の方に興味を持っており、卒業研究もその方向に進むつもりでいました。しかし大学に入ってから、地球物理学教室の中に宇宙空間を扱う地球電磁気学講座があると知り、当時は課題演習を2 つまで履修できたこともあって、「とりあえず話を聞いてみようか」というぐらいの軽い気持ちで説明会に参加しました。説明会では、第1 講座の測地学講座から紹介が始まり、第5 講座の地球電磁気学講座は最後の順番でした。その第5 講座の説明に荒木先生が登場され、説明が始まりました。突然教室には深みのあるバリトンボイスが響き渡り、その声に惹かれ話を聞いているうちに、研究内容そのものへの興味もどんどん強くなり、課題演習の履修を決断するに至りました。

課題演習では荒木先生にも直接ご指導いただき、ホイスラー観測データを用いた磁気圏の電子密度推定に取り組みました。地球周辺にこれほどダイナミックな領域が存在し、またその様子を地上の観測データから探っていく内容

に強く惹きつけられました。宇宙物理学の課題演習も履修していましたが、4 年生の研究室配属では地球電磁気学講座を選択し、卒業研究では荒木先生にご指導いただくことになりました。

SGEPSS の皆さんなら、荒木先生の研究といえば地磁気急始変化 (Sudden Commencement: SC)を真っ先に思い浮かべるのではないかと思います。私の卒研のテーマもSC についてでした。先生の代表的な業績として Araki (1994) がよく知られていますが、私が卒研の指導を受けていた1993 年度は、ちょうどその別刷が刷り上がった時でした。研究テーマについて説明を受ける際、先生から署名入りの真新しい別刷を手渡していただいたことは今でも記憶に残っています。今では別刷りを閉じているホチキスが錆びてしまっていますが、後に多く引用される代表的な論文を、SC 研究の第一人者である先生から直接解説していただいたことは、今振り返っても本当に貴重な経験でした。

荒木先生の本分野におけるデータ整備への貢献は言うまでもありませんが、数値計算にも

強い関心をお持ちでした。磁気圏グローバル MHD シミュレーションが磁気圏の様子をとらえることが出来ることに注目され、「SC を数値シミュレーションで再現できないか」と考えておられていました。私は大学院進学後も卒研のテーマを続けるつもりでしたが、先生の意向もあり、当時気象大学校におられた藤田茂先生のご指導のもとで磁気流体波の研究に取り組むことになりました。私が不肖の弟子だったため、SC のシミュレーションまでたどり着けなかったのは大変申し訳なかったのですが、後に藤田先生がグローバル MHD シミュレーションで SC の再現に成功され、その結果が Araki (1994) とよく一致していたことに荒木先生がとても喜んでおられたのを覚えております。

私が千葉へ異動するころ、荒木先生は退官を迎えられましたが、その後も精力的に研究を続けられたことは会員の皆さんもご存じかと思います。学会でお会いするたび、先生は私や家族の近況を気さくに尋ねてくださり、私の研究の内容にもいつも興味を示してくださいました。特に私が電波観測を始めたとお伝えした際、先生もかつて電離圏観測をされていたこともあって、「面白い研究テーマだね」と励ましてくださったことが強く印象に残っています。先生のさりげない一言が、とても心強く感じました。

コロナ禍が落ち着き始めた 2023 年の秋、京都で MTI 研究会などを含む合同研究会が開

催され、久しぶりに先生とお会いする機会を持つことができました。京都訪問の直前に、先生が体調を崩されていたことを伝え聞いたため、ご様子が気になっていました。出来ればお会いできないかと思い連絡を取らせていただいたところ、荒木先生の方からお食事を提案くださり、藤田先生、研究室 OB の方々と一緒に、京大時計台下レストラン「ラ・トゥール」で昼食をご一緒することができました(写真)。実際にお会いした荒木先生は、ご病気とは思えないほどお元気そうで、ご自身の病状についても淡々と客観的に説明くださいました。その様子はまるで学会発表をしているかのようであり、もし自分が同じ状況になったら、これほど冷静に語れるだろうかと思いに深く胸に刻まれたのを覚えています。残念ながら、この会食が先生とお会いできた最後の機会になってしまいました。

もし今もご健在であれば、昨年来の記録的磁気嵐について、真っ先に解析を始められていたのでしょう。研究対象を徹底的に突き詰め、考え抜き、それらに真摯に向き合い続ける姿勢の大切さは、荒木先生から学んだことの中でも特に大きなものです。先生の域に達することは難しいかもしれませんが、一歩でも近づけるよう、これからも先生の研究への姿勢を模範として研究を続けていきたいと思います。

改めて、先生との思い出を偲びつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。



京大時計台下レストラン「ラ・トゥール」にて、2023 年 11 月 10 日撮影。荒木先生(前列)、藤田茂先生(後列左から 2 番目)、研究室 OB(後列左から、家田さん、筆者、細川さん、齊藤さん)。

(地球電磁気・地球惑星圏学会 第 255 号 会報)

恩師・荒木先生を偲んで

竹内 智彦(1997 電磁気)

荒木研において、私や周りの院生は荒木先生のことを裏で「殿(との)」と呼んでいました。確か当時、大河ドラマがなぜか研究室で流行っており、信長に心酔する秀吉が『殿～～！』と叫ぶ様を面白がって真似していた…とかそんな感じだったように思います。もちろん荒木先生は信長のような苛烈な性格の人物ではありませんが、品格という点では一国のお殿様と呼ぶにふさわしく、「殿」というニックネームは言い得て妙でありました。

私が荒木先生にご指導いただいたのは、学部4回生(1996.4)～博士課程修了(2002.3)までの6年間。2002年3月は荒木先生が退官されたタイミングでもありますので、私は荒木先生の“最後の弟子”ということになります。

院生時代、荒木先生から最初に与えられた研究テーマは「1995年5月13日のNegative Sudden Impulse とそれに関連する太陽風構造」というものでした。荒木先生のライフワークであったSC(Sudden Commencement)は惑星間空間衝撃波に起因する地磁気の急増(Positive Sudden Impulse, SI+)ですが、太陽風動圧の急減少に起因して地磁気が急減少するNegative Sudden Impulse(SI-)というイベントもあったのです。衛星の観測精度の向上と複数の衛星による同時観測により、太陽風構造をより微細且つ立体的に捉えることができるようになった時代でもあり、研究はスムーズに進み、直ぐに論文発表につなげることができました。結局のところ、研究テーマが良かったのであり、その研究テーマを考え付いた荒木先生の慧眼が素晴らしかったのです。『研究テーマを思い付いた時点で研究の半分は終わっている』とどなたかが仰っていた覚えがあるのですが(荒木先生だったかもしれません)、まさにその通りであると思いました。その後も、太陽風構造と地磁気応答をメインの研究テーマとさせていただき、御陰様で大学院における私の

研究生活は滞りなく進みました。

しかしながら、順調な研究生活とは裏腹に、自然科学に対する私の熱意は冷めていきました。もちろん自然科学が重要であることは理解していましたが、私個人の興味はより実務的であり社会に繋がったものに変化していったのです。博士号を取得した後の1年間(2002.4～2003.3)、学術振興会特別研究員としてアメリカに留学する機会にも恵まれたのですが、結局その留学期間の間に私は転身することを決意しました。具体的には、特許の専門家である弁理士に転身することを決意しました。弁理士には文章作成能力が必要不可欠なのですが、院生時代に論文を書くのが比較的得意であった私は、弁理士という仕事に活路を見出そうとしたのです。

2003年1月、私は留学先から荒木先生に一通のメールを送りました。研究者としての道をこのまま進むのではなく、特許業界に転身したい…ということを初めて打ち明けるものでした。我が殿に対して謀反を起こすようなものであり、メールを送る際には本当に申し訳なく心が痛みました。“最後の弟子”がまさかこのようなことを言うなんて、さぞかしがっかりされるであろうと…。私の告白に対して荒木先生が実際にどう思われたかは分かりませんが、荒木先生は私に心温まる励ましのメールを送ってくださいました。「謀反などと思う必要はない、地球物理で学んだ若者が世の中に羽ばたいていくのは私にとっても喜ばしい」といった趣旨でありました…本当に救われました。

その後、特許業界に転身して4、5年後くらい経過した後だったと記憶していますが、ふと荒木先生から打診がありました。今の大学院生に向けてキャリア形成について講演をしてくれないだろうか？というものでした。もちろん二つ返事でお引き受けし、『博士号を取得した後

に転身するということ～特許業界に転身した事例～』というタイトルで講演をさせていただきました。これは、大学院生の皆様に向けたものではありましたが、私の中では荒木先生に感謝を伝え、また、あなたの弟子は立派にやっていますよ！と現状をご報告するためのものでもありました。「大学院での研究活動を通して培った経験とスキル、特に、論文作成の経験とスキルは現在の特許の仕事で遺憾なく発揮されている。大学院での研究活動をプロの研究者への助走と限定的にとらえる必要はない。大学院での研究活動は、様々な分野において役立つスキルを身に着けることができる良質な訓練である。現に、私は今こうして特許業界でやっています…」というような趣旨のお話をさせていただきました。それに対し、荒木先生からは「確かに君が書いた論文は非常に読みやすかった」というお言葉をいただき、そして、数年前と同様に「地球物理で学んだ人材がこうして社会で立派に活躍しているのは非常に嬉しい」というお言葉も再度いただきました。このお言葉をいただいた私の方が嬉しかったのは言うまでもありません。

その後も、年賀状や知球会(同窓会)の場で、「君の書いた論文がまだ引用されているよ」とご連絡を頂いたりもしました。このようにお気遣いいただいていることがまず有難かったですし、また、弟子として最低限のことは残すことができたかなと安心することもでき、とても嬉しいご連絡でありました。

最後にもう一つだけ、荒木先生からいただいたお言葉を紹介したいと思います。上述の留学先での生活が終わる直前、すなわち、自然科学から特許業界に転身する直前、私は荒木先生に再度感謝のメールを送りました。それに対する荒木先生からのお返事が手元に残っていましたので、その一部を抜粋して紹介させていただきます。

・・・ともすれば自分の身の回りだけが世界だと思いがちですがそれは世界のほんの一部なので、いろいろの国で多くの人に接しないと視野が広がりません。アメリカ社会とそこに住んでいる人を知ることは、日本と日本人を見直すことでもあり、それを通して人間そのもの考えることでもあります。その意味でも、この1年は大きな意義があったでしょう・・・

当時の私は、また大河ドラマの秀吉の真似をして「殿！恐悦至極に存じます！！」といったおちゃらけた返事をしたように思います。が、年を重ねるにつれて、この言葉がいかに広い視野と深い洞察に基づくものであるか、その凄味のようなものが分かってきたような気がいたします。私の人生が大きく変わろうとしていたときに頂いたこの有難いお言葉・・・私はこれを今でも事あるごとに思い出しては、励まされているのです。私にとって荒木先生はいつまでも「殿」であり続けるのです。

合掌



2017年11月11日 京大知球会 関東支部 懇親会にて

荒木先生に導かれて始まった研究の道

細川敬祐(1998 電磁気)

私は小さい頃(小学校高学年くらい)から、漠然と「研究者になりたい」と考えていました。きっかけは、テレビで京都大学の広中平祐という数学者を目にしたことでした。当時はまだ研究者と数学者の違いもよく分かっていませんでしたが、とにかくその姿やしゃべり方が格好よく映りました。さらに、自分の名前(敬祐)と広中先生の名前(平祐)の漢字が一文字(だけ)一致していたことにも勝手に親近感を覚え、「広中平祐のような研究者になりたい、京都大学に行ってみよう」という憧れを抱くようになりました。

それから10年ほどが経ち、念願が叶って京都大学に入学したものの、現実とは想像とは少し違っていました。入学前は、京大の教員はみんな広中平祐のような「形」をしていると勝手に思い込んでいたのですが、一回生の時の共通教育(一般教養)の講義には、そのような颯爽とした先生は残念ながらいませんでした(風変わりな「形」の先生はたくさんおられたのですが…)。大学生活自体は本当に楽しく、あっという間に時は過ぎていきました。二回生になる頃には広中平祐への憧れもいつしか薄れ、自分の専門分野を現実的に考える時期を迎えていました。

そんな二回生の秋のことです。専門課程の先生方がオムニバス形式で行うリレー講義の場に、荒木徹先生が「降りて」来られました。荒木先生は、茶色のツイードのジャケットを着て、片手をポケットに入れながら、あの渋い低音ボイスで淡々と講義をされました。今となっては、それは我々がよく知っているいつもの荒木先生のスタイルなのですが、二回生の時の私は、その姿を見た瞬間に、幼い頃にテレビであの広中平祐を見たときと同じ感覚を覚えました。突然、雷に打たれたように、「この先生のような研究者になりたい」と思いました。

この講義で荒木先生が話された内容を、細部まで覚えているわけではありません。しかし、

おそらく磁気圏や地磁気についての概論的なお話をされていたのだと思います。人工衛星のデータを使った研究(確かMAGSATの話だったと思います)にも触れられ、自分も人工衛星による観測データを使って地球近傍の宇宙空間を研究してみたいと言えるようになりました。その後、三回生の課題演習や四回生の課題研究を経て地球電磁気学の道へ入っていくことになりますが、この二回生向けのリレー講義こそが、私の専門分野(ひいては人生)を決めた瞬間でした。余談ですが、その年の電磁気学講座の課題演習や課題研究には、例年になく希望者が殺到しました。荒木先生が二回生に与えたインパクトは非常に大きく、あの講義で雷に打たれたのは私だけではなかったのだと思います。

私自身は、四回生の時の卒業研究で荒木先生にご指導をいただいた後、修士課程からは家森先生に主指導をしていただく形で学位取得まで進みました。そのため、先生から研究の細部について直接の薫陶を受け続けたわけではありません。しかし、セミナーなどを通じて研究のアドバイスをいただく機会は頻繁にありました。それに加えて、荒木先生の「形」(具体的には立ち姿、振る舞い、話し方)には、大きな影響を受け続けてきたと感じています。荒木先生は、我々が部屋をノックしたときに、「はい」ではなく「はいい」と、あの美声で少し引き伸ばすようなお返事をされていました。自分が学生からノックを受ける側になった今、私もついあの声を真似して返事をしてしまいます。

あの秋の日に荒木先生の講義を受け、その姿に感銘を受けなければ、私が今、地球電磁気学分野の研究者として歩んでいる人生はありませんでした。私の人生の決定的な転機をくださった荒木先生に、心からの感謝を捧げるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。これまでの温かいご指導、本当にありがとうございました。

メッセージ集(出欠フォームに届いたもの)

Kojiro Irikura (1963 応用地球物理)

荒木先生は大学院地球物理学専攻の2年先輩で、その後京都大学の教員になってから、さらに同窓会活動についても大変お世話になりました。日本学術会議などの対外的な活動でもご協力いただきました。突然の訃報、残念でなりません

林 順三 (1973 電磁気)

4回生の時に課題演習で院生の方に混じってゼミに参加し、夏に観測所のあった間人に研究室のメンバーとその関係者で海水浴に行き、秋は盛岡市で開催された地球電磁気学会に参加したことなどが思い出されます。

海水浴の時の写真が縁で半田さんの結婚式の準備を亀井さんの自宅で行ったり、秋の終わり頃半田さんと亀井さんと一緒に香川さんの運転する車で白山登山をしたり、院生の方々との交流も思い出されます。

課題演習は前田先生が中心で、荒木先生はサポート役でそれ程お話はされませんでした。南極で亡くなられた福島さんかタローとジローで有名になった北村さんのどちらかががピッケルを持って研究室の中を歩いていたという話をされたことを覚えています。

卒業後は地球電磁気学講座の卒業生名簿作成時と、亀井さんの追悼文作成時に荒木先生から連絡が来て、2002年に東京の治療院、2006年と2008年には柏の治療院に大学の広報物を持参して来院され、30年くらい前に学部卒業で就職したのに、よく覚えて、来院して頂いたなど感激したことを思い出します。

前田先生が100歳を超え、研究室の有志で先生にお会いしようというお話が荒木先生から届いたのですが、コロナで実現できなくなり、翌年前田先生は亡くなったのですが、コロナが落ち着いてから、荒木先生を中心として、前田研究室のメンバーが集まる会を開催してもいいのではと思っていたのですが、荒木先生もお亡くなりになり残念でなりません。

岸本清行 (1976 海洋)

地磁気や重力の測定(観測)データはグローバルな地球や宇宙の構造・運動と直結しているって、学部の単位取得授業?で聞いたけど。(あつ、宇治の巨椋池で真夜中にエアガンなどで地震計並べて苦勞して表層の地層探査してたけど、マントルの構造まではわからなかったのは、、、?)

橋本学 (1979 応用地球物理)

1997年に京大に戻ってきて以来、知球会・地球惑星科学専攻において大変お世話になりました。専攻会議などでの荒木先生の太いお声が耳に残っています。

津川 卓也 (1999 電磁気)

荒木先生には大学院修士・博士課程の5年間お世話になりました。直接の指導教官ではありませんでしたが、当時研究対象としていた電離圏変動や大気重力波についてよく助言をいただき、私の研究生活のスタートの重要な一部となりました。研究に対する姿勢やスマートな立ち居振る舞いに憧れました。どうぞ安らかに眠りください。

2007 年4月実施の「1957 年理学部入学生の入学 50 周年記念文集」へ

荒木徹さんが寄稿した近況・退官挨拶

昭和 32 年京都大学理学部入学生の近況（平成 19 年現在）

☆荒木 徹(S1 地球物理)

京都市生まれ。地球物理学科大学院修了。
その後の経歴は下記「退官のご挨拶」を参照。

1999 年秋の人間ドック検便で潜血反応、内視鏡検査で直腸腫瘍発見、平で大きい(20mm) ので内からの切除は出来ず、12 月に開腹手術(43 日間入院)。ガン細胞が見つかったが、上皮内の初期ガンだったので大事に至らず。ただし、術後数日で左足に血栓ができ、今も左足周囲が右より 1cm ほど太く、エコノミークラス症候群候補者。

退職(2002 年 3 月)後、1-2 年で在職中の慢性疲労から回復し、今も学会発表など研究活動を続けている。中国極地研究所の客員教授として春秋 2 回上海へ行き、講義と研究指導をしている。科学の普及活動にも関心があり、例えば、地磁気、磁気嵐、電離層、オーロラ、太陽風、地球電磁気学、スペースサイエンスなどの話なら出来るので、気軽に声をおかけ下さい。

「退官のご挨拶」

私は、今年 3 月末で定年を迎え、理学研究科地球惑星科学専攻太陽惑星系電磁気学講座担任の職を辞することになりました。大学院修了後、工学部電離層研究施設（現宙空電波科学研究センター、1967-70）、理学部地球物理学教室（70-77）、地磁気世界資料解析センター（77-89）、地球物理学教室（89-2002）と、35 年間で京都大学職員として過ごしたことになります。1990 年からの 10 年間は、

上記地磁気センターのセンター長を務めました。

国際地球観測年（IGY）が始まって、最初の人工衛星スプートニク 1 号が打ち上げられた、1957 年に大学に入学したので、私の学部～大学院時代は、飛翔体現場直接観測が、放射線帯、磁気圏、太陽風、無衝突衝撃波などの新しい構造や現象を次々に発見し、磁気流体波理論[Alfvén, 1943] が、磁気圏波動現象に適用され始め、太陽風理論[Parker; 1958]、磁場再結合[Dungey; 1961]、磁気圏対流[Axford-Hines; 1961]等の新しい理論や概念が、確立していった時代でありました。

このように刺激的な学問の興隆期に身を置き、ささやかながら自らの研究を続け、知的好奇心旺盛な、多くの学生諸君の教育に関与できたのは、大変幸せであったと思います。大学院時代から今まで、この地磁気センターを、研究上のアイデアを確かめる実験室として、教育と研究に大いに利用しました。

大学と学会・学界の活動を通じ、また、上記講座と地磁気センターの整備充実のため、多くの方々のお世話になりました。お陰様で、地磁気センターは、研究・教育に直結したデータ活動を行う、ユニークなセンターとして世界的にも注目されるようになり、1999 年度には、教授ポストを付けて頂いて、独立することが出来ました。皆様のご支援に厚くお礼申し上げます。

（京都大学理学部附属地磁気世界資料解析センター「地磁気センターニュース」No.73：2002 年 5 月 30 日）



2001 年8月 IAGA (国際地磁気・超高層物理学会) / IASPEL (国際地震学及び地球内部物理学協会) で理学部学友の橋爪道郎会員 (1961 測地) と再会 (ベトナムにて)



2004 年3月 15 日「太陽風」の予言者 Dr.Parker 来訪 (2003 年度京都賞受賞)



2016 年5月 14 日 JpGU (日本地球惑星科学連合) Fellow 受賞



等持院山門



足利尊氏の墓



等持院東墓地



編集

徳田八郎衛(1961 電磁気)

牧野雅彦(1980 電磁気)

中田裕之(1994 電磁気)